



した。長兵衛は、このあたりにこの親父が
住んでいると聞いたことがないので、どこ
の人だろうとおもいふりむくと、親父も長
兵衛の方をふりむき、ニッコリとほほえみ
ました。

その後、何回となくであったある日、こ
の親父は、りっぱなあわせにもんぺをはき
その上にそでなしをきて、頭に頭巾をかぶ
り、りっぱなぞうりをはいて、ゆつくりと
歩いてきました。そして、右手に朱ぬりの
柳樽、左手には小ぶろしきにつつんだおつ
つみを持っていました。長兵衛は意をけっ
して、「とつぜん失礼ですが、あなたさ